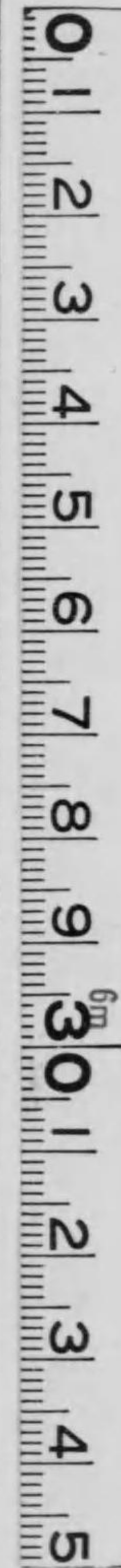


烈婦小野訃導

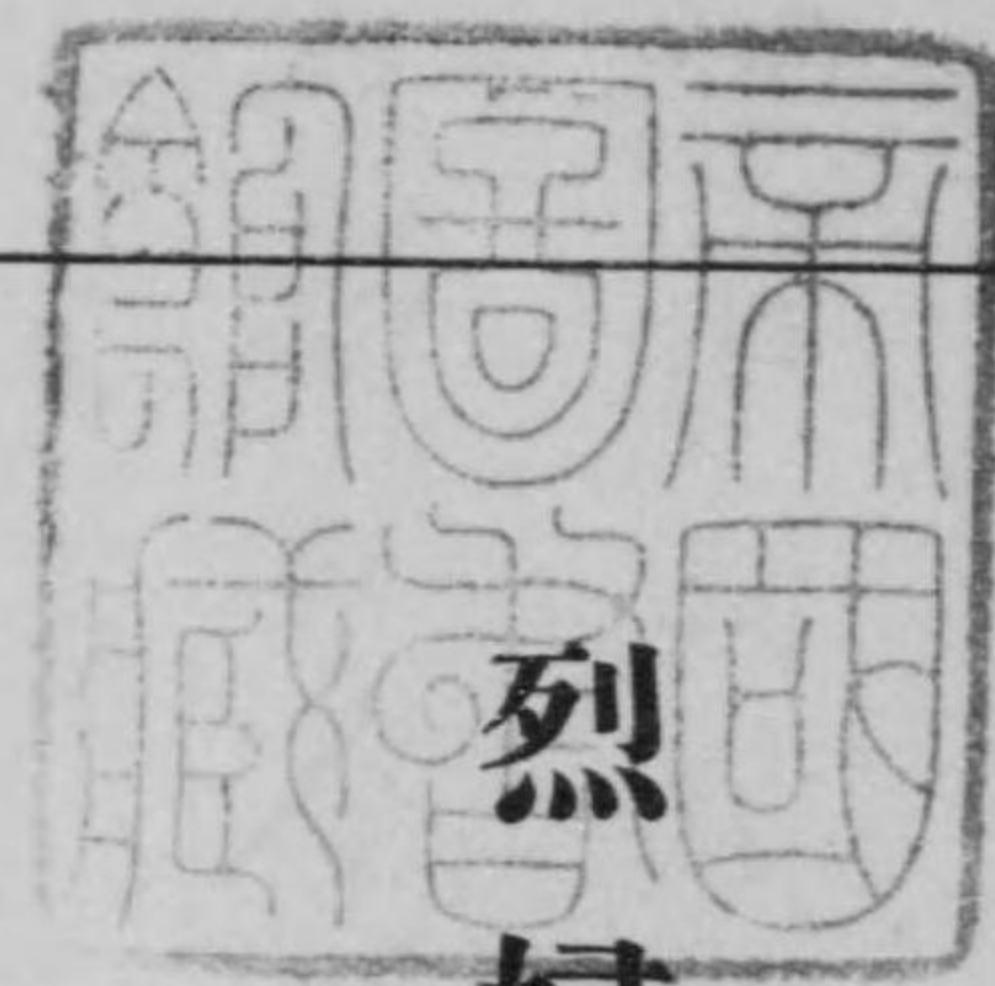


始



烈婦小野訓導

11-616



烈婦小野訓導

杉浦重剛先生題詩  
正臣先生題歌

中田武雄著

著者寄贈本

大正  
11.11.20  
寄贈





純誠殉職致其身  
 垂範千秋泣萬人  
 何料如今得知色  
 一枝彩筆畫精神

三浦司行草



題言



小聖やうき嬢が至誠至潔なる  
ふるまひも畏くも明治天皇の  
木のの身をかりみむごとく人々  
為つくまやむとの務たるらむ  
と詠もせたまふるふ金くかあひ

ていさしききりきり又此の  
仰ぐべく慕ふべき烈女の事  
蹟を精考し調査し縦横自  
在の筆を以て世に宣傳せらるる  
中田武雄 天竺と云ふこと  
明治天皇陛下よとせあつしり

傳しきりきりきりきり  
人の心をなやませしむる  
大徳の心を以て守らるるを  
徳とせしむるを以て徳とせしむる  
を以て徳とせしむるを以て  
徳とせしむるを以て徳とせしむる



烈婦小野訓導

正しくござるよめち

ちぐゆらそ長ききき

聲きき名を

涙をききぬ

大正十一年のりりり

志守り人坂正彦



## 緒言

東京より神戸に至る東海道鐵路沿線の廣告は、酒が多數で、次が化粧品、三番目が賣藥である、若しこれが、國民の氣風を窺知する象徴となるならば、現代の我國民は酒に沈醉し、化粧品に浮身をやつし、ために健康を損じて、神經衰弱し、辛くも賣藥の力に、餘喘を保ちつゝありと、言はれはすまいか、果して然らば、忠實勇武を以て世々其美を濟せる、臣民の子孫として、吾人は何の面目かある、此時に際し、幽合の蛩音として、惰眠の警鐘として、暗夜の霹靂として、皇天の使命として、女性の身に依り演出せられた、義勇公に奉ずる壯烈の殉難、洵に鬼神を泣かしむるものあり、宮城縣刈田郡宮村、宮尋常高等小學校、訓導小野さつき女史が、其水に陥れる生徒三人を救はんため、身を挺して碧流に躍り入り、二人を救ひ、殘一人を救はんとして、共に溺れたる、其勇敢義烈は、平素勅語の聖旨を體現し、至深の慈愛と、靈活の意氣を以て、終始したる實蹟と相俟つて、今を警しめ後を照らすの典型たるを念ひ、自ら進んで其境に臨み其家に就き、これを查明蒐集し、編綴して一卷となし、以て江湖に頒たんとするに際し、烈婦の寫影前に跪き、香を焚き再拜して、此稿を供し、刊行成るの日先例を襲ひ、謹て一本を桃山御陵に奉獻し、一本を家祖の靈祠に捧げ、以て國家のため美蹟の永遠不



滅を祈念懇禱す。

大正十一年十月三十日

教育勅語紀念日

學制頒布五十年紀念日

著者謹識



### 烈婦小野訓導目次

芳躅を慕ひて	一
家庭の醇厚	二
烈女の生ひ立	四
修學の奇蹟	六
椽の下の力持ち	七
慈愛の權化	九
光ある學校	一〇
正直と本氣	一二
壯烈の殉難	一三
終天の遺憾	一五

至誠の感激……………一七

親から貰つた顔……………一八

友情蕩然……………二〇

墮涙の遺物……………二二

千古の遺芳……………二四

死して信を守る……………二六

過て改むるに憚らず……………二八

光風霽月の襟度……………三〇

四十七士の私淑……………三一

無限の追懷……………三三

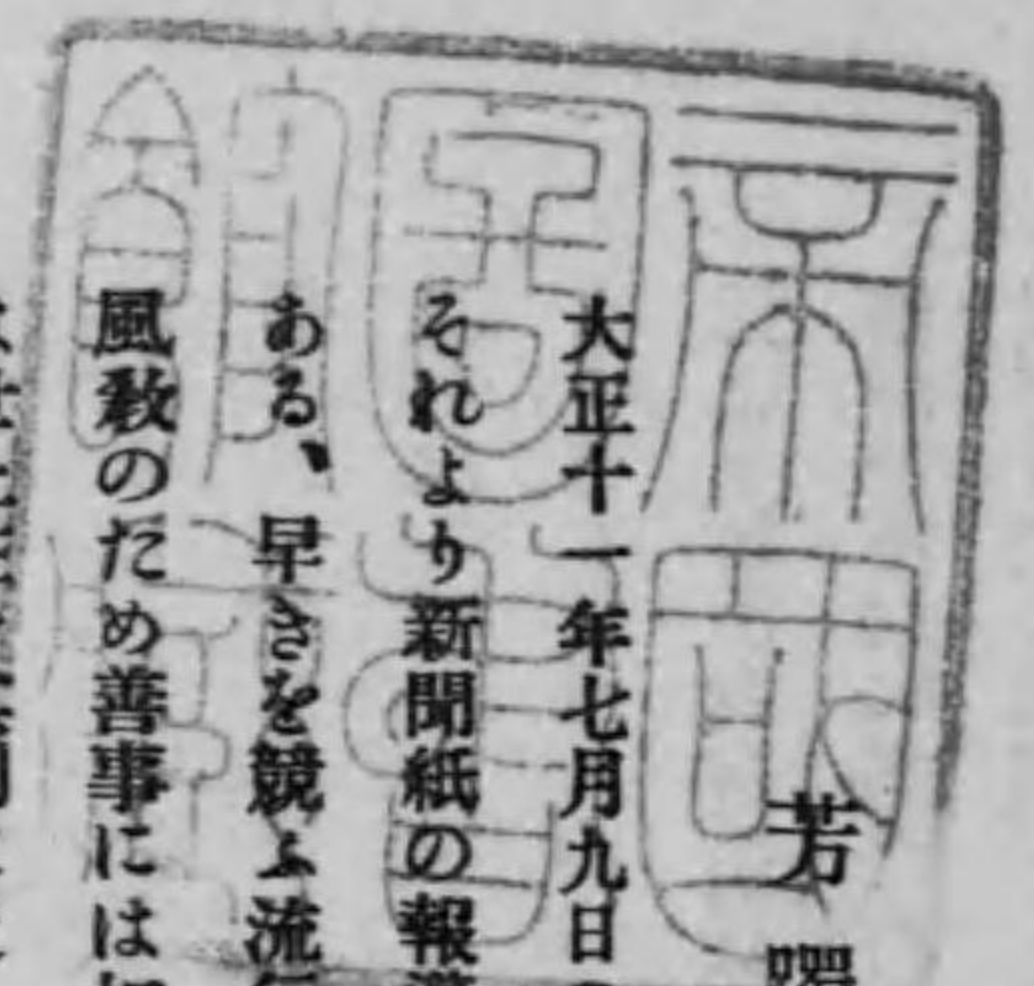
兒童の哀慕……………三五

國家永遠の礎……………三六

# 烈婦小野訓導

中田武雄著

芳躅を慕ひて



大正十一年七月九日の新聞に報道せられし烈婦小野訓導殉難の記事を読み、至大の感激に打たれた、それより新聞紙の報導は日を逐ふて一報は一報より詳細となるに従ひ、一字一涙卒讀に堪へるものがある、早きを競ふ流行熱は已に訓導の生ひ立より殉職まで芝居に仕組み活動寫真に取りて宣傳するは風教のため善事には相違なれども、これを脚色し狂言的とするに於て其真相に幾分の誤りを傳ふるは世上往々其例に乏しからず、かくては偉大なる烈婦の行跡が後世に及び多岐の異説を生ずるの恐れあるを懸念し、寧ろ現地に就き其關係者に親炙して直接其事蹟の要領を收むるに如かずと思ひ、七月二十二日を以て上京し東京市視學佐々木吉三郎氏が逸早く現場に急行した實見談をも聞き、鬱勃として心動き土裂くる九十度以上の炎威を侵し上野より東北線に投じ、白石驛に下車せしは二十三日午後

三時取調の準備智識としては二三の新聞記事と郵便線路圖に依り、驛より宮村まで一里二十町あるを知るのみ、白石驛に「小野訓導の事蹟取調の方は刈田郡役所に御立寄り下さい」とある揭示を見て、郡役所の門を敲けば郡長も郡視學も不在で唯島山郡書記一人の宿直、頼む木の下に雨漏りの立場ではあるが郡教育會で咄嗟の間に編輯した噫小野訓導と題する一小冊子を惠まれ、道筋など慇懃に指示せられたるに一段の氣勢を得て郊外の田圃路より白石川に沿ひ、松並樹の木蔭を辿りつゝやがて宮村の聚落に近づける右側に「小野訓導殉難所入口」の建札を見て今更らの如く胸を躍らしつゝ、旅宿に投じ涼を取る暇も心せかれ宮村小學校校長我妻貞亮氏を其住居に訪問した、蓋し此稿は他の游草類と同じからず苟も世道人心に一大關係を及ぼす絶世の女傑、稀有の烈婦小野訓導の眞事實を其儘に叙するには元より諸諛戯言滑稽鬻弄等の言辭を避け、成るべく謹嚴なる筆路を取り光を日月と同うする烈婦の大精神を不朽に傳へんと欲する微志を諒とせられ、讀者諸彦は愚劣なる吾輩の文字を取らず其記する事項が寸毫の虚飾なく逐一眞事實に出るを以て如何に訓導が偉大なる人物にして其行爲が悉く活教訓なるかを看取せられんことを祈るや切なり。

## 家庭の醇厚

宮城縣刈田郡福島村大字長袋二十番地これが小野訓導燥髮の靈地で其戸主は小野政治と云ふが訓導の父君である、齡六十八歳母君の名はきつ六十四歳、長兄喜作四十二歳及其細君と孫男二人女一人とである、訓導の次兄貞勝君は養子となりて谷姓を稱へ、其次の兄は一年志願の豫備少尉となり亦他家に入り立派な生計を立てつゝあり、姉をたけよと稱し養子を迎へ新たに家を立つ然して訓導は末女と生れたのである、小野家は附近に於ける著名の門閥で今は本家分家が八戸に分かれ、悉く中流以上の資産を有し、訓導の生家は巨大な母屋に三箇の附屬建物と一棟の土藏を存し立派な邸宅である、吾輩が其門を敲いて名刺を通じ來意を告ぐると、其父君は此春怪我のため歩行の不自由なるにも拘はらず特に袴を穿て出迎はれ吾輩を上座に招じて遠來の勞を謝し不束な娘の仕業に就き過譽敢て當らざる旨を述べらるゝ言動の格勤なる、又其母君も静淑にして能く行届きたる挨拶振り實に此親にして此子ありの實感を深うせざるを得ぬのである、長兄喜作君も日露戰役に殊勳を建て金鷄勳章の光榮を荷はれて居る、元來此地は低山小丘の起伏せる間に介在し、夏草の茂りを踏分け奥深く入りたる山の中腹に位し、所謂酒屋に三里豆腐屋に二里と云ふ桃源中であるから、訓導の家も其家具諸調度は極めて前世紀の儘なるに拘らず、父君母君及長兄君が相當に時代に對する理解を有し謙讓の美德に富める點は言ふも更なり、聞く處に據れば小野家一族は本家分家を擧て悉く勤儉産を治むる不文憲法を存し、互に親睦協和

し一郷の模範と稱せられ、特に訓導の父君は公共事業に盡瘁せられ、教育の熱心家で頗る名望ありと云ふ、訓導の靈位は奥の一室に其寫眞を中心として錦欄の壇上に安置せられ、各官公衛諸團體よりの寄贈品は山となつて供せられ、香火冢煙其四邊を繞る、吾輩は跪座三拜思はず不覺の涙に咽び茫然自失するもの久うし、やがて、晚鴉夕陽を報するに及び其羨ましき家庭の靄然たるに名残りを惜み後ふり回りつゝ、一山を隔てたる訓導の新墓に展し、寸誠を捧げ後髪を曳かれながら其地を去つたのが七月二十四日午後六時二十分であつた。

#### 烈女の生ひ立ち

剛健俊邁なる獨眼龍伊達政宗は千古を達観するの明を以て當時使節を羅馬に送り驥足を海外に伸さんとの雄圖を抱きし餘烈の及ぶ所片倉小十郎あり、伊達安藝、松前鐵之助、三澤はつ子(芝居の政岡)林子平等ありて傑物輩出し、近時各戦役に於て第二師團の兵士は堅忍剛直を以て世に稱せらる、嗚呼其堅忍剛直これが我國の精華である、皇祖皇宗の遺し給へる國民性である、我臣民祖先の遺風である傑物輩出せし奥州仙臺の城下を距る數里の刈田郡福岡村大字長袋は土地柄こそ山間の僻落ではあるが、大和民族生粹の血は滾々と流れ父は公益の盡瘁家、母は貞淑温良、兄は國家の功勞多き金鷄勳章の所

有者、而して訓導は明治三十四年六月十四日を以て呱呱の聲を此地に擧げて以來二十二年間に涉り、小學校時代に於て感冒に罹り僅かに八日間缺席したる外は曾て恙ありし例なく、堅實なる精神は堅實なる身體に宿り母君の物語りに五人の子を育てしがあの娘に限り泣くと云ふ事が極めて少く、襁褓の世話が頗る短期で終れりとは果して梅檀は二葉より芳ばしく、二歳三歳の頃は如何なる兒童も手に觸るゝものを口にするが常なるに、訓導の幼時は父母若くは兄弟の與ふる物に非れば苟も口唇に上ばすことなかりしと、三ッ兒の魂百までで物心付きてより身を終るまで如何なる場合でも家に在りては長者より給するに非ざれば自ら進んで口腹に充つる事は萬が一にも絶無なりし、何れの家でも惡戯時代の兄弟喧嘩は殆ど十が十まであり勝ちの事なるに、訓導の幼時には父母の言は勿論腕白盛り兄弟の言ふ事にも必ずハイ／＼と齒切りよき返事をなし、傍より見れば兄弟の言ふ所が随分無理と思はるゝ事柄でも更に逆ふ聲を顯はせし事なく、其遊戯が常に室内に限られ友達を引入れ又は友達の家を訪ふことなく、父母より給する玩具で何時でも一人遊びに餘念なく、五六歳の頃よりは運針を喜び雛の衣裳を裁縫し、手鞠をかざるを唯一の樂しみとなし、時としては藁屑を以て小さな草鞋を作る事もあり父君も母君も訓導を養育するには少しも小供として世話を焼くの氣苦勞を感じたる例はあらざりし。

## 修學の奇蹟

六

前にも述べた通り訓導の家は山の鞍部に在つて何れに行くにも幾つかの山、幾つかの谷を跋涉せねばならぬが、訓導の初めて登つた村の小學校も訓導の家との間に丘陵やら谿間やら横はりそれに倭樹雜草が生ひ茂り一尺にも足らぬ細道には蛇も居る狐も出る、到底都人士の想像も及ばざる山の奥なるに歲齒も行かぬ訓導は金鐵を溶かす炎天にも風霜膚を裂く嚴寒にも曾て登校を怠ることなく、雪の深き時は積つて二尺に達し數日溶けざるに訓導は足袋をも穿たず素足の儘なることが珍らしくないのである、元來意思強き訓導は幼き時より暑ければとて寒ければとて餓えたればとて、疲れたればとて、容易に其苦痛を訴へることなど父君も母君も亦他の人々も曾て耳にせし例はあらずと云ふ、茲に最も特記を要するは訓導が學校より歸りて後如何なる學科をも唯の一度これを復習したる事實がないのである、試験前などは兄君や姉君が心配して復習を勸むると訓導は習ふたことを忘れさへせねば復習の要はない又明日習ふことは明日先生に教へを受けて覺へればそれでよい、下讀みなどすると反つて間違ができるとて學科の事など少しも意に介する模様なく、相變らず自ら好める裁縫や手縫かゞりなどに日を送りしが、所謂鈍重にして根強き天才は争はれず、後年全国を驚動せしむる壯烈を敢てせる大

精神は此時より已に其萌芽を含み、蛇は三寸にして人を呑むの概があつたのである、此不勉強と不熱心と外見せられた試験の成績は前後を通じ何時にても優等、首席、級長、の一個又は二個三個を逸したる事はないのである、此の如く奇蹟を收めながら訓導は曾てこれを誇ることもなかりしは勿論、問題の難易なども口にした事なく、大正三年三月二十六日を以て尋常小學の全科を、大正五年三月二十六日高等小學全科を各優等を以て卒業したるも、僻地の悲しさは高等女學校等もあらざれば父君に請ふて白石町立實科女學校に通學する事となれるが、今度は更に峻坂險路の一里を隔る困難を十六七歳にて女子の身體に變化を生すべきかよわき時代なるにも拘はらず、風雨寒暑を侵し一日の缺席なく優良の成績で大正七年三月十九日業を卒つたのである。

## 椽の下の力持ち

これが訓導の宮城縣女子師範學校第一部在學中同期の寄宿生が蔭で訓導を呼んだ綽號である、嗚呼椽の下の力持ち訓導の堅忍努力の性格を言明して餘蘊なしである、形式を避けて實質を重じ華を去り實に就く我乃木將軍夫妻の一生がそれである、吾輩は訓導を尊んで乃木將軍を女性にしたものと云ふ、唯事業の大小輕重は立場の同じからざるより自ら然らしめたのである、大正七年訓導が實科女學校を

七

卒業する後師範入學の志望を父君に述べた、父君は世の女教員なる者が往々其職責に副はざる行動多きを慮り訓導の乞ひを容るゝに躊躇した、訓導は母君に依て更に懇請し遂に父君の許しを得て其年の四月半官費で仙臺の女子師範生となつた、寄宿舎に入つて後足かけ五年の間時間勵行萬事凡帳面これが訓導の生活と影の形に隨ふが如く一體不可分であつた、更に特記すべきは女生の常として一組の中にも親疎を作り分け隔てを定め、物陰に入り隅々に隠れ私語を爲し蔭口をきくは免がれ難き習ひなるに、訓導は此習に染まざるのみならず如何なる立場如何なる事情の下に在ても不満の色も不平の言もなく和氣霽々春風面を撲つ別乾坤常住の態度を變せぬのであつた、忌憚なく言へば訓導の容姿は艶麗なる美貌家にあらず、又一笑百媚の愛嬌家にもあらずることは今其母君姉君に直接するも思半ばに過ぎぬのである、然るに不思議なるは一度訓導の警咳に接すれば何とはなしに懷柔を受くるの感に撲たれぬものはないのである、寄宿生中に紛紜が起るか葛藤が生ずるとき訓導が仲裁の常任委員の格で其場に顔が見ゆると、喧嘩の當事者は互に調子抜けがして訓導の二言三言の間に双方の角が折れ遂に談笑の中に局を結ぶので、後には何かゴタ／＼の起る毎に同窓生が「小野さんに來て貰ふ」の一言で鼻りが着くほど訓導は朋友間に神聖視せられた、食堂や浴室の出入下駄箱の整理便所の世話等同窓生が氣の付かぬ隙に訓導は何時も椽の下の力持ちをして居る毎學年優等及級長は殆ど訓導の専有權とまで

謳歌せられても訓導自身はどこを風が吹くかといふ態度であつた。

### 慈愛の權化

訓導が小學校通學時代に雨雪の際下級生を背負て往復した事は珍らしくない、現に私も負はれた、私も、私も、と云ふものが幾人もある、履物の鼻緒を立て、貰つた、傘をさしかけて貰つた、手荷物を持つて貰つた、と云ふのはザラにある、十二歳の時小學校の歸途強き吹雪に兒童の昏倒せしを訓導は自己の上衣を脱てこれに着せ帯を解て兒童を脊負ひ其家に送り届けたるが家に歸りて誰にも其事を告げざりし、實科女學校時代に不良性を帯びた生徒を感化し成績劣等な生徒を督勵した話を傳へられて居るが、何分にも小學校と云ひ實科女學校と云ひ職員は更なり小使まで悉く交送し、成績品さへ明かでないのは誠に遺憾至極、若し暇ありて其行先き行先きと徹底的に追究するならば烈婦のため更に光輝を發揚するあらんも吾輩の微力今これを實行するに由なきを恨む、冀くば江湖同憂の士其芳躅未だ地に墜ちざるに及んで、これを拾集し以て不朽に傳へんことを、吾輩は加藤郡書記に導かれ實科女學校の校舎を觀たるが今は町立より縣立に移され、増築やら改築やらで唯其一部のみ當時の建物を存するに過ぎない、訓導は師範在學時代修學旅行として東京及京阪、奈良を見學し、伊勢、桃山を參拜し、

或年は海濱に或年は山岳に修學旅行の際其出入に車輛の乗降に旅館の着發に小使となり、保姆となり慈母となり良妻となり何くれとなく懇切丁寧汝々として倦まず厭かず、生徒呼んで區長さんと云ひ、校長職員までに公然村長さん區長さんと呼ぶるゝに至れるは、いかに朋友相信し博愛衆に及ばず實行者なりしかを知るべきである、訓導の家より白石驛まで山路約一里、白石驛より仙臺驛まで廿九哩、訓導は在學中必要なる學用品の外は何一つ買入れたことなく、暑休と歳末に歸省する時僅に兩親と家に在る兄の小供とに少許の土産を持ち歸るに止り、其父母の膝下の歸省は暫くの事で特に末子の訓導なれば母君の愛撫深甚を加へ切に静養を勸むるも、訓導は直に家政を手傳ひ子守に従事し鋤鎌を執て農耕の勞に當る、其慣れざる業なるに拘はらず其能率が殆ど人の一倍増加を見るを常とし桑を採るに訓導の容器は一杯に充つる時、他の人々のは恰も五分通りなるに人々は唯驚歎の眼をみはるのみであつた、成年に達した後でも家に在りて何人が何程勸むるも自己の膳部に取分けられたる食物に非ざれば決して箸を下したる事はないのである。

### 光ある學校

大正十一年三月師範科第一部を卒業し、女子としては前例少なき初任の九級下俸四拾圓を給せられ、

志望に依り刈田郡宮村小學校の訓導に補せられた、訓導は其實高等師範に入るの希望なりしも父君が家政上の都合で將來檢定試験に合格するまで入學を停止し、先づそれまでは就職することに決したのである、小學校は勿論實科女學校、師範學校にも訓導が初めて登る前に父君は必ず校長に面會を求め不束な娘を嚴重に訓育しくれと依頼するのであつたが、宮村小學校に赴任するについても三月二十九日父君は特に校長に對し不肖なる娘が教職に就くからは將來校長自身の子として最も嚴重なる訓戒を與へられたき旨を述べた、校長は職に就てより二十餘年間に教員の親が來て監督を依頼せられたのは小野氏が嚆矢であるから、只管其懇懃に敬意を拂ひ且父君の求めに依り校長は學校の一軒隔てた質朴の評判高き家庭の丹野榮之丞の奥座敷を訓導のために借受け自炊することを取極めた、其翌日訓導は僅かばかりの手荷物と寢具とを携へて赴任した、訓導の家と宮村の學校とは約一里半を隔て其三分の一は車馬の通はぬ山坂で外に樵夫の通ふ捷路がある、訓導は父君が此春怪我をして歩行の自由ならざるを心配しこれを慰問するため學校の時間後此一里餘の捷路を三日にあけず歸省し、時としては夜に入ることも珍らしくない、朝は太陽の昇ると共に父母の膝下を辭し職員の誰もが未だ登校せざる以前に訓導は職員室の椅子に就くのであつた、校長我妻貞亮氏は此宮村の産で年久しく在勤し信用ある人で、男八人女五人の職員は一家庭の如くに提携されて成績も良き學校であるが、村が水火の災厄に罹

つたので校舎は頗る頽廢し改築の企圖あるも未だ着手に至らず分教場と併せて兒童七百五十人を收容するも總て貧弱を免がれざるに、訓導は特に此貧弱な事實を熟知して赴任を希望し常に言ふ先輩諸君の指導を受けやがては光りある學校にして見たいものだ、嗚呼其光ある學校嗚呼其無限の光、それは訓導自身であつた。

### 正直と本氣

小野訓導が初め師範入學の志望を其父君に述べた時父君は何故に教育に志すかと問はれたるに、訓導は小供を教ゆるのが何より樂みであると答へた、訓導が四月四日初めて教壇に登りたるより七月七日まで七十一日間早出遲退を勵行せられ、特に目立ちたるは授業時間を報する警鐘の一二分前に訓導は必ず受持生徒の群れ居る場處に近寄つて其入場を世話するのが毎時間判で押した如うであつた、授業終つて教場の洒掃時間になると訓導は生徒に先ちて必ず自身等を執り雑巾をもかける、六月の末頃から暑き日の庭掃除には木蔭の部分を生徒に拂はし日光の直射する部分は訓導自身で塵を拂ふのが常であつたと堤訓導は校庭の樹を指し聲をくもらせながら、アノ蔭が生徒コノ日向が訓導と吾輩に示された、召伯の宿りし甘棠を周人が永遠に伐採を禁じて其德政を記念した昔を今に見るのである、訓導の

受持ち教室は校の左側で天井もなく壁も破れ總ての器具も甚だ粗惡なるにも拘はらず、訓導は粉壁燦爛たる大厦よりも珍重し男女合計六十六名の生徒を我子として教養し、常に實踐の二字を信條とし二た言目には「人は正直と本氣が第一で學問は第二である」と教へたのである、書き方を授くる時に「踊り子の如うな字を書くな」と云ひ此二つは訓導が教壇に立つ時の標語として學校内外に評判せられた、訓導は何の學科にも興味を有し其造詣も深きが中に算術を最も得意とする程の緻密な頭腦の持主なるにも拘はらず、平生元氣旺盛で如何なる場合にも活潑勇往の態度を失はず、生徒に向ひ「朝日を見る時の心持ちで元氣なれ」と教へた殉難の七月七日午前中生徒に四十七士のお嘶しをするにも總て人は元氣が本であるといふ意味を繰返したのを生徒は覺へて居る、其午餐後の休息時間に職員室の座席では日露戰役誌に兄君の寫眞の掲載ある頁を披き讀まれつゝありしを隣席の職員が目撃したのである、大雨將に來らんとして風樓に滿つるの概がいかに深刻なりしかを察するに餘りあるのである。

### 壯烈の殉難

七月七日此日は古來牽牛織女が一年一回の天の河に邂逅し合歡の清遊を賦すと言ひ傳へたる日なるに何事を窺たる淑女は君子の伉儷を俟たず壯烈の死を遂げんとは、凡そ血あり涙あるものいかでこれ



を等閑に聽くべきや、吾輩の文は拙なり文は拙なれども事實は神聖なり活教訓なり、千古不磨なり、  
 借も訓導は此日午前の授業を終り午後豫定の野外授業として零時四十五分頃五十六名(十名缺席)を率  
 て學校より約六丁餘を距る白石川の左岸字中河原に至り、燬くが如き炎暑を物の數ともせず山容水態  
 實寫の業を授け終るや、男生は水に入り涼を取らんと乞ふた、訓導は危険を慮り許さず生徒が幾度も  
 繰返して求むることの餘りに切なるより、訓導は其水淺き處に履物を去て足を浸すことのみを許した  
 間もなく一人の女生が石に躓き裾の水に濡れたるを訓導は腰をかゞめて絞りつゝある隙に腕白盛り  
 の男生中其三人が密に訓導の目を偷み着衣を脱て走り込むと見へしが、三人が三人ながら行きなり深淵  
 に陥没した、嗚呼危機一髪矢は弦を離れた此時此際やはか生を捨て、義勇公に奉せずして置くべきや、  
 矢庭に訓導は唯下駄のみを残し穿ちたる袴を去るに暇なく着のみ着のまゝザンブとばかり飛び入り深  
 さ乳を没する處に志村政雄を捉へて河岸に投げ、更に引返して流れ行く大場徳治を救ひ揚げ三たび奮  
 迅の勇を鼓し、遠くして且深き所に沈める、成澤與右衛門を救はんとして袴を解かんと試みたるも、已  
 に二回まで水に浸り緊縮して意の如くならず、見る／＼訓導の血相變り水面を睨み目眦裂けんとする  
 を見て取りたる女生鈴木きうは右より男生藤間知春は左より訓導の袴に取縋り「先生危いから行かな  
 いで」と叫ぶや五十餘名の生徒聲を限りに「先生危い先生危い」と絶叫するを振切り、決然として邁

進身を躍らし水深八尺の底に潜り須臾にして首を出し再び潜りて又首を出したる際は、緑の黒髪振り  
 亂れて面部を蔽へるか約十七八間を隔た河原に群がり立て一意に訓導を凝視せる生徒に向ひ「早く學  
 校に知らせ、早く學校に知らせ」と二々聲叫ぶや否又水底に没すると見へしが間もなく袴の裾のみチ  
 ラと浮み其儘影も形も跡白石川の仇波は蒼々として終古其色を變へぬのである。

### 終天の遺憾

白石川は其源を刈田郡の極北檜下岳より發し、東流して横川を容れ更に齋川兒捨川を併せ宮村にて松  
 川、白川村にて高田川を合せ流域十八里柴田郡に至て阿武隈川に入る、訓導が殉職の地たる宮村字中  
 河原では其幅二十間許りなるが、其左岸に屬する十五六間は深サ一尺内外に過ぎざるに右岸は河底急  
 斜して八尺に達し水勢緩げれども、岸に觸れては渦を捲く所がある、溺れる兒童二名を救ひ衣袴を脱  
 する暇を惜み更に深淵に潜り入りたる訓導は二たび首を水面に現はし、三度目に潜りたるまゝ遂に姿  
 の見へずなりしかば今まで驚きの眼を見張り居たる生徒五十餘名は一時に聲を揚げて泣き出し、しど  
 ろもごろにうろたえ廻る内、男生山家要四郎外三名があへぎ／＼學校まで駆けつけ體操中の日下訓導  
 の前に倒れる如く辿りつきたれども、狼狽と恐慌とで言ふ所明かならず、辛ふじて「先生が水に」と

聞取れしより居合せたる佐藤堤の二訓導と共に日下訓導はまつしぐらに現場に馳せつきたれども、數多の生徒が何事とも知らず泣き崩れて事實を聞かんとするも口を開くものなく途方にくれたるが、其内一二の生徒が川の深淵を指し「先生が」と云ふを便りにすれば小野訓導が水に溺れたらんと數町を隔て釣りを垂れ居たる白川村高橋卯三郎及齋藤寅吉の走り來れると共に水底各所搜索の末其沈みしと想定せらるゝ地より二十間許り下流に訓導を發見し、近き右岸の草叢に擔ぎ上げ手當中訓導の外尙生徒一名沈み居るをも判明し、更に搜索の結果四十分後これをも發見せるが、急を聞て馳せ集るもの漸次其數を増し村民は警鐘を亂打して事變を報じ、郡吏警官及醫員等も多數輻輳し約三時間人工呼吸其他百方手を盡くしたるも、烈婦小野さつき女史は芳紀二十一年二月を一期とし、千古不朽の偉績を留めて芳魂永へに呼べども返らず生徒職員村民公務員等悉く遺骸を繞り聲を吞まぬものとはなく急報の生家に達するや父政治君病を推して馬に跨がり現場さして赴く途中、櫛の齒をひく急使に逢ふ毎に一報は一報より危急を告げ來るに、父君は我子の安危よりも生徒の安否を氣遣ひ若し生徒が死して我子が生きたらんにはと胸を躍らせつゝ近寄るや、否先づ與右衛門の死屍を撫で「娘の死は問題ではありません生徒が氣の毒で堪えられません」と……與右衛門の父亦時を移さず駆けつけ我子の死骸を顧みず河原に横はれる訓導に取り付き「粗暴な我子のため貴い先生の命を失はせまして済みません」と

頭を地に着け詫び入りし殊勝なる赤心の流露に撲たれ重て袖を絞らぬ者はあらざりき。

### 至誠の感激

吾輩が殉難の現場に臨む一日前東京より活動寫眞の技手が來て當時の有様を寫さんため衣袴を着したる儘一名の生徒を抱き、胸を没するまで河中に入りたるに流れの勢ひが衣袴に激觸し砂が掘れて立どころに脚下自らくぼみ渦を捲き危険名狀すべからざりしと、これに依りて察すれば訓導が最後に潜りたる後袴の裾がチラと漂ひたるは與右衛門を抱き渦に捲かれ進退の自由を失ひ轉倒したる結果にはあらざりしか、縦しやそれにしても訓導が二度目に首を出し「早く學校に知らせ」と呼びたる時生徒が走り告げたらんには蘇生したらんかと思へども、生徒が一途恐愕に襲はれて其姿の見へずなるまで其場を去るに忍びざりしも亦小供心として諒とすべく、訓導の懷中時計が午後一時四十分にて停止し一番に駆けつけた人々が二時十分前後なりしといへば、其人工呼吸を施すまでには約四十分を經過し與右衛門は尙四十分の遅緩なれば洵に是非もなき運命とや言はん、訓導は宮小學校に赴任以來日淺きに拘はらず何事にも至誠を以て村人に接し其德望漸く普からんとするに先ち事變が起りたれば村人の痛惜同情も殊の外深甚にて宮村役場は村會を開き直に全會一致村葬を可決し、宮城縣知事は七月七日付

を以て小學女教員として全國に比類なき一級俸の百八拾圓に進めて其三箇月分を給し、尙扶助料年額參百六拾圓を與へ文部省も亦特例を開て金壹百圓を授け、其他公私諸體團より金品の寄贈少からず、事變の報全國に傳はるや各地の新聞紙は筆を揃へ女性の身で此職務に殉じた壯烈は、浮華に流れ淫靡に囚はれつゝある人心を刺戟せる効果の多きを激賞せざるはなく因て何等かの施設を以て此遺績を不朽に傳へんと宮城縣は特に考案を凝らしつゝあり、此事も此人も宮城縣に係るとは言へ訓導の性行と其精神とは我臣民祖先の遺風を顯彰したる洪範として宮城縣人たるを否とを問はず、我國民は悠久に遵守服膺する道を講せねばならぬ、訓導の遺骸は泣く泣く村民に送られて福岡村の生家に移され茶毘に付したるが訓導の父君は學校職員及村民の切なる懇請を容れ芳骨を二分し一半を宮村の三谷寺に一半を福岡村の舊塋に埋葬した、七月十四日葬儀の前夜靈柩を宮小學校に安置するに際し村民の徹夜讀經を希望するもの幾百なるを知らず、已むなくこれを三回に分ちて舉行し葬儀の日は近邑の民家悉く業を休み家毎に香火を供し、宮城縣知事を首として縣内外より會葬するもの約一萬を數ふるに至つたのは天人共に感激の深甚なるを象徴するに餘りあるのである。

### 親から貰つた顔

吾輩は訓導の素行を更に詳悉して自他鑑戒の資を得んがため、宮村役場宮小學校及校長我妻氏の私宅訓導の同居した丹野榮之丞及び訓導の袴に取付き押留めたる生徒鈴木きうの家に就て一事一言をも漏らすまじと探りたれど惜しきことには在勤僅か七十一日に過ぎざりしたため、蛟龍は池中に在つて全鱗を見る能はざるも尙雲を呼び雨を起すの素質ある片鱗を窺ふべく學校備付の出勤簿には四月四日を始めとして七月七日まで遅不參なく捺印せられ、授業日録には明日の授業科目と其時間とを詳記して前日必ず教務係と校長との検印を受くる内規である、其帳簿の調製も他の教員のは洋式假綴りなるに、獨り訓導のは麻絲を用ひて日本式本綴で其毎日の記載が悉く整然と謹書され七月七日殉難當時の日課まで明かになつて居る、學校ではこれを寶物とすべく大切に重襲してある、總て訓導の筆跡は教育會其他より懇請せられ斷簡零墨も残りなく割愛し終つた後ながらも、特に遠來の吾輩のため校長は百方搜索の末堆積する書類中より發見した綴方草稿紙に受持生徒鈴木きうの鉛筆書の末尾に訓導がペンで「評、讀めない字が多いからもう少し氣をつけて御書きなさい」とあるそれは殉難二日前の課題であつた、筆跡は其人の性格を體現すと云はれてあるが其の卓拔雄勁は一見して敬虔の感に打れぬものはないのである、訓導の同居せる丹野榮之丞は稼業のため常に家に在らず、其妻さこと娘あさ(た)とのみなるが其語る處に據るに、訓導は常に元氣でサク／＼して居られ人を諭すに親切鄭重を極め曾て怒

つたり叱つた例はない、時として人を笑はせ或は面白い事をされた物事がキマリヨク奇麗好きで着物も帯も袴もキチンとしては居るも木綿の外に絹物は一切なかつた祭禮の前日着替へを一枚持つて來られたがその日になつてマア此儘でよからうと云つて着替へられなかつた、小鏡と櫛一枚の外は香水は勿論紅も白粉も手に觸れた事がない、或時榮之丞の妻が先生少しお化粧をなされませと勧めたら訓導は「親から貰つた顔が一番イ、」これが訓導の答へであつた、お友達の女教員の來たのが唯二度であつたが、其時訓導はドロップを買つて來客と家主の母子と自己と四ツに分けて喫した時の外に間食の例がない、自炊の副食物は生家から持ち來た野菜と定つて居た毎朝訓導は炭を家主の勝手元に持參し火種を貰ふ榮之丞の妻がそれは先生餘り正直過ぎると云ふと訓導はそれではこれからやめますと素直に受けられた。

### 友情 藹然

他人から化粧を勧められた時「親から貰つた顔が一番イ、」と答へた訓導の一言は能く其性格を説明して居る、唯訓導の志業は未だ十分の一にも達せずして事變に遭遇し、アタラ大器を惜むも尙餘りあるがなれどもキリストは三十二歳、顔回も吉田松蔭も二十八歳、小楠公も木村重成も二十三歳、訓

導の立場が一小局部で生前の事業は江湖に唱導する價值はないが、其平素の操持と殉難の意氣とは百英千傑を凌駕して千古の典型を貽したのである、訓導の同窓生が一人宮村に嫁して居る、或日訓導は途中でそれに面會し君の來訪を請ふは無理だが私は時間外何時でも遊びに行ける身分、併し君の家には舅姑もあり家事も忙がしからん私が訪問して君の迷惑になるや否が氣遣はれるから差控へると云て一度も行かなんだ、家主の娘あさ子は訓導を親とも姉とも敬ひ訓導はあさ子を子ども妹とも愛撫し別に蚊帳をつるは無益なりとて一の蚊帳に二人寝て骨肉も及ばぬ親しみを結んだ、七月初旬よりあさ子は病に臥した訓導は晝夜心を痛めて看護に手を盡くして居たあさ子の母は其病の重らんことを恐れ七日訓導の殉難事實を押包んで居た、あさ子は夕に及ぶも訓導の姿の見えずして人々の立ち騒ぐに不審を起し病床に在つて訓導を連呼し三晝夜程食はず眠らず煩悶狂亂の態に陥つた、校長我妻氏の娘たか子も同窓で今は白石小學校に教鞭を執つて居る、七月六日訓導は途中たか子に邂逅した、此時其父校長は學事視察として京阪地方に旅行中でたか子は前日より稍不快の氣味なるも推して出勤したのである、訓導はたか子の顔を見て父君の御留守中ソナ蒼い顔をしては責任が濟まぬではないかと言はれたが是ぞ訓導の袂別辭であつたと、其友情の深厚なるをたか子は今も泣て物語るのである七月七日遭難の急報が學校に達するや否男教員は現場に走る、女教員大沼いと子は訓導が水に入れると聞き定め

て衣服を濡らせるならんと仕立おろしの自己の單衣を抱へて現場に馳せ行きたるに其變り果たる姿に驚倒したるもせめてものなくさめにとて其單衣を死屍に被らせ自己の帯を解て締めたるなど、何れも訓導が友人間に信望の厚かりしを思ひ知られるのである、學校では今も宿直室に祭壇を設け佛名と寫眞を安置し香華を供し出入毎に職員生徒禮拜しつゝあり村葬を營んだ三谷禪寺にも吾輩は特に參拜した木の香新らしき墓標の前には香煙縷々として土饅頭を繞れる手向の花には赤誠をこめて展墓する人々の血涙が宿りて花を染めて居りはせぬかと思はれるのであつた。

### 墮涙の遺物

七月六日は東宮殿下が北海道御巡啓のため東北線に依り白石驛と北白河驛との間を御通過の際、殉難地即ち宮村字中河原に於て白石川を隔て拜觀するが近くして便なるに依り、宮小學校は職員が全部の生徒を率て參向した、小學校から二丁程は國道で松並樹の處から左に折れ細い畦路に入ると一丁程の處で長サ三四間に涉り水が通路の半面を浸して生徒が履物を濡らす虞がある、訓導は一同を俟たせ置き五六間離れた草原より藁芥を集めて抱へ來り浸水の場所に撒布したが未だ不足である、訓導は更に大抱へに持來りこれがため職員生徒は恙なく通過した、吾輩は當時の生徒を案内として現場に臨む時

勿體なき感に打たれつゝ踏みながら其藁芥の一莖を抱に收め、訓導が師範在學中同窓間に謳はれた椽の下の力持ちの實現が眼前に行はれたのを此上もなき好記念としたのである、そこで村役場員學校職員に其場所に標札を建て殉難地弔問の人に感銘の資料らしめんことを勸告した、小學校で佛壇の傍に手厚く保存してあるのは當時の衣類で木綿縞の筒袖單衣と三寸幅木綿眞田織單夏帯とモスの袴と白木綿の襦袢と足袋及び腰巻とアルミニウムの角形辨當箱とである、此筒袖單衣は訓導が年十五の時母君より與へられ七年間着古した洗ひ晒らして、眞田帯も淡赤の縞物だが縞目も判然せぬ程色が褪めて居る、大沼教員の話に襦袢の半襟は八寸幅の「モス」を三ッ割に裂て使用されてあると、母君の言はるゝに訓導は幼き時から裁縫を好むに拘はらず自身の着物を欲しがらぬ故訓導の衣類は總て姉の作り替へたものだ、我妻校長が靈前に再拜し遺物の包みを解て逐一示された際吾輩は其説明を聽き了らざるに一見さめんと感涙に沈み何等の辭をも發し得なかつたのである、若し此袴の紐の常の如くすらくと解けたらんには、與右衛門も救ひ得て訓導も溺れざりしならんにと胸が張り裂く思ひに堪へなんだ訓導は寒暑晴雨の別なく厚き朴齒の入つた足駄のみを履いて居られた草履や駒下駄などは用ひた事がない、それは丈夫で節約の意味ならんと母君の話である、訓導は毎月俸給を受取ると其儘父君の前に呈出せられ、父君より金壹圓を貰ひて小遣ひとするが常であつた、父君はせめて參四圓も持

つて行けと言はるゝと入る時には頂戴に來ますと答へた、四月分の俸給を初めて受取た時訓導はこれは手を着けべきものでないと別に五拾錢の菓子を買ひ心せわしく福岡村の両親の許に急いだ。

### 千古の遺芳

訓導の平生は曾て流行を逐ふなどの氣風は夢にだも知らざる態で六月二十六日同窓會の仙臺に開かれた時一般の友達は今日を晴れと新粧を凝らしたが、訓導一人は在學中の筒袖其儘であつた常に不言の間に他を感化することに勉められたが口頭で人を非難した事もなければ自己を辯護した事は尙更なく誰に向つても城郭を設けず赤心を人の腹中に置くこと云ふ態度で言語は何時もハキ／＼して語尾に力があつた、喜怒哀樂は必ず衆と共にするも人の眼前で人の爲に努力することは避けて居た、師範在學中生家より珍らしき食物など送り來れば自身は一切取らず總て友達に割愛して惜まぬのであつた、部屋では常に同窓生からお父さんと呼ばれて居た、會などの時の餘興は最も得意とする所で其餘興が必ず教訓の意味を含むのであつた、曾て前期生を送る會の餘興に訓導自身が「ベストロッチャー」に扮して行られたのが大出來で頗る喝采を博した、各種の運動も好きで特に水泳に熟練であつたに此事變を生じたるは果して與右衛門を抱き揚げんとして衣袴の重さがため自由を失ひ溺るゝの已むなきに至れる

ので如何に訓導が生を捨て、義を取り身を殺して仁を成すの大覺悟を有したるかを推知するに難からぬのである、訓導の名は戸籍簿にさつきと平假名でかゝれ辭令書にも自筆の書類も皆同一の文字である、陰曆五月に生れた故に季節にちなんで父君の名づけられた由である、前にも記した如く其幼時裁縫が好きで折りには藁で小サナ草鞋を作りて遊び要なき際に無駄饒舌をせず、小學時代は圖畫手工に創作が多かつたと傳ふるも其成績品の保存なきは惜むも尙餘りありと謂はねばならぬ、宮村は頗る寒村で交通不便風俗諄朴なると同時に小學生徒などが見知らぬ人を見る時は唯驚きの眼を見張るので、吾輩は校長の承諾を得て訓導の受持ちであつた教室に於て其生徒に向ひ種々な問を發しても不審な顔をするに非れば唯俯向いて物を言はぬ、たま／＼答へをするものあればそれは例の仙臺なまりで意味が解せぬ他の教員の通譯を煩はす始末で折角の忘れ片見とも思はるゝ受持生徒の口より訓導のおもかげを偲ばんと欲したのも其半は殆ど晝餅であつた、事變の後直ちに刈田郡長は現場より歸路福岡村の生家を弔問した時母君は郡長の慰藉に對し「我娘の過失で人様の子を喪ひ誠に濟みません然るに娘の死に御弔問を受けては痛み入ります」と最愛の子の變死に逢つた利那に年老いたる野媼の態度此の如し至誠と剛健を以て其身を終始したる訓導は此母の胎内より生れたのである。

## 死して信を守る

「身を立て道を行ひ名を後世に揚げ以て其父母を顯はすは孝の終りなり」これが訓導の一生である、僅に二十一年二箇月の生を此世に受けたる訓導の一言一行は悉く教訓である、此腐敗せる風俗壞亂せる思想に對する一大刺戟である、形式に囚はれて實質の空乏せる教育界に對する活訓誨である、訓導の殉職は軍人が矢石を冒して鋒鏑に斃れたので激賞を惜まざといふものゝ、其場に臨むでは随分あり得べき勢である、吾輩が特に訓導を尊信するは訓導の平素が教育戊申二勅語の實行者である點である、殉職の點は潜越な申分ながら吾輩も學んで或は得るかも知れざるが、其神格を有する素行は天の梯架かけて昇るべからざるのである、乃木將軍の平素が世の大遺訓であるならば其縮小されたのが訓導であらねばならぬ訓導が師範時代のと就職時代のと唯二枚の古櫛中吾輩は特に其の一枚の割愛を母君に懇請した、母君は父君の肯諾を得てこれを許された、吾輩は其望外の幸に狂喜雀躍して持歸つた、吾輩は今より知れる限りの女性に此櫛で其髪をくしげづらしめ崇高なる遺徳に感じ其頭を一新せしむべく希望するのである、訓導の事變は午後一時四十分頃である其長兄喜作君は家に在つて田草を取り午餐に歸宅して午後二時前小屋の入口に腰かけのまゝ、稍まどろむ隙に、訓導が急ぎ歸り來る喜作君は何

故今日は早く歸りたるやと云へば訓導は少し用ありと答ふ、喜作君用とは何事かと聞き返すや否訓導の姿は消へて夢は醒めた、喜作君は不審な夢よと思ひながら其儘田草取りに出掛けると間もなく事變の急報があつた、訓導の従妹に二十八歳の小野くさよ君と呼ぶのが東京に住して居る數日前に或事を問合せの書狀が來た、訓導はその返信を發せざる以前に於て事變が起つた七日の夜明け近頃くさよ君の夢に訓導が常に異なる蒼い顔をして「返事を出さないで済まぬことをした」と云くさよ君夢醒めて變な事よと思ひ再び枕に就くと再び現はれ、又も「返事を出さないで済まぬ事をした」と其儘姿は消た翌朝新聞の電報欄を見ると其事變の記事が夢を事實とせしにくさよ君は驚倒した、此の如き事は愚夫愚婦の眉唾物語として理論家より葬られた古き問題ではあるが、事實は事實だから研究として記述するのである、従妹に返信の遅延せしは不信の責ありと感じた訓導は死してこれを陳謝したソクラテスは毒杯を仰いだ後隣人に鷄一羽を返す事を依頼した蓋訓導の家は禪宗で訓導の信條は「正直と本氣」の外宗派上の信仰はなかつた吾輩はこれを終巻として筆を擱き、更に關係者の叱正を乞て崇高なる遺訓を江湖に傳へ以て不朽を計らんとするのである。

以上一項より十六項に至る記事は宮城縣の現地に臨み各當事者に就き蒐集し當時岐阜日日新聞に通信連載せしものに係り以下六項は通信に洩れたるもの及關係者に交渉返信を得たるもの新聞雜誌に散見したるもの等に就き更にこれを確め悉く信憑するに足る事項のみを掲載す。

### 過て改むるに憚らず

政岡は我子の死骸を抱き上げ、コレ千松、奥州五十四郡の一家中、所存の臍を堅めさせた、そなたの一死、鶴千代君の御武運を守らせ給ふ、これは淨瑠璃の文句で、三澤はつ子が女ながらの忠義振り、千古の美談を貽した、其精神は、取りも直さず、小野訓導の犠牲的精神である、はつ子は其身こそ死せざりしが、懸替へなき最愛の實子を殺し、主君鶴千代を危難の中に全ふし、小野訓導は、二人の生命を救ひたる後、更に深淵を目掛けて飛び入り救ひ得ざりし他の一人と死を共にした、訓導の生家、福岡村の隣は、白石町、これが親の仇、志賀團七を討ちた、宮城野(實名みや)信夫(實名のぶ)姉妹の舊跡である、其事蹟が多少演劇的、潤色を経たらんも、孝女の一撃不俱戴天の父讎を殮した盛事は、我國民性の精華である、訓導が平素の操持と云ひ殉難の義烈と云ひ、三澤はつ子や宮城野信夫の奥床かしき歴史の熱血が其の背景となりて、訓導の全部を染め成して居たのも想ひ知られる、若し訓導が天壽を完うしたらんには、必ずや大教育家となりて、此腑甲斐なき教育社會を、刷新する活教育を、施したるやを想見すべきである、イデヤ更に、其遺芳を拾ふて、吾輩か景仰の念を償ひ、併て愛を江湖の志士に割かんとす、訓導が休暇で歸省すると家事は一から十まで働くので母君は常に暑休中は家

内全體が樂だと云はれ嫂は勿體ない程深切にされたと繰返して居る何時も歸省すると直に村の鎮守に参拜して母校と校長の家とを音訪れ大正九年七月二十六日の日記に家に歸り食卓に向へば父母の心盡くしがしみくゝと感せられ涙一しづく危く落ちんとするを笑ひにまぎらすとある、師範校在學中、常に人間味を失ふては駄目だと云ふが持論で、全科卒業式二三日前、謝恩會の夜、同窓生は皆歸郷の準備やら何やら蚊やら、ソワソワして忙殺されつゝある際、盲腸炎の重患に罹り、入院せんとする一人の同窓生があつた、訓導は餘興係主任で、一寸の隙もなきに拘はらず、病人の身支度、手荷物其他何くれとなく、手を盡くして送り出しながら、「大丈夫だから、氣を確かにしなさい」と云ふ訓導の目には一杯の涙であつた、曾て長兄君が寄宿舎に尋ね來る筈の日に、其時刻が過ぎても來らぬに、折悪しく訓導は外出して、用を辨せねばならぬ時間が來たので、己むなく門を出ると入れ違ひに、長兄君が來られ、暫く訓導を俟ちつゝあつたが、汽車の都合で、長兄君は辭し去られた後に、訓導が歸り其話を聞て非常に恐縮し、長兄君の持ち來れる風呂敷包を披けば、母君の心盡くしになれる、餅と餡と砂糖とが出た、流石に氣丈な訓導も此時ばかりは、看るゝ顔色蒼白となつて、兩眼には包みきれぬ涙を宿し、嗚呼濟まぬ事をした、嗚呼濟まぬ事をしたと、繰返し其夕は、遂に晚餐を廢し詫び狀を認めたのである、古人が過ちを改むるに憚らざる、これを過ちなしと云ふ訓導の如きはそれである。



## 光風霽月の襟度

師範三學年の時、教育勅語發布の三十年祭の感想文に、教育勅語の主旨を自身に體現して、習慣性となし、身を以て生徒の模範となるが、教育者たる當然の身分であるとかいてある、これで訓導の常に學問は第二で、正直と本氣が人間たる第一であると揚言しつゝ、ありたる、實踐者なることが思ひ知られるのである、師範校の賄ひ方に、十三年勤続せる老婆が、常に直情徑行を以て許されて居る、一日訓導に向つてあなたの顔は氣に入らぬが、あなたの心は底の底まで、感心したと云つた、凡そ女として何より大切な顔が、氣に喰はぬと云はれては、十人が十人まで頬をふくらすに、訓導はこれ聞き大きな口を開てアハ、、、曾て寄宿舎の風呂で入浴する時、多勢混雑し、訓導は押されて灼熱せる鐵管に其脊中が觸れ、掌大の火傷を負ふた、尋常の女子ならば啼きもすべき處、訓導は殆ど知らぬ顔其消毒薬で洗滌するにも、傍らより心配氣にいたわると何ともないと云て、更に其苦痛の有無を聲色に現はさぬのであつた、暑中の修學旅行として海濱生活をした時、下級生の炊事當番には、訓導が代りて其任務に當り、私が御飯は甘く焚てあげるから、君達は勉強して良成績を挙げ給へと、其卒業前に教生として附屬小學校に授業をなす時も、此部屋から出る者は、悉く優等でなければならぬから、

私が掃除はするから君達は精々努力し給へと、常にこんな風に人を獎勵するに、深切を極めて居られた。炊事場で皿を洗ふ際、或一人が誤て皿を破壊し、悄然として爲す所を知らざる立場に、訓導はそれが不可抗力で、何人も責任を負ふべきものでないと辯解し、これを庇護し後密かに、其人を訓戒した、部屋の硝子窓を破りたる人のあつた時も、訓導は自ら進んで罪を負ひ、舎監室に至て陳謝し、後其硝子破りの話しの出る毎に、訓導は必ず他の話しに紛らかして、話題を轉換するに勉めた、厨川白村の象牙の塔、賀川豊彦の死線を越へて、婦人公論、思想、八大教育思潮などの新刊書類は、訓導の常に愛讀する所であつた。訓導は果して舊慣に囚はるゝ人に非らざると同時に、新思想を咀嚼するの雅量も豊かで、非常な細心家であると同時に、剛健洒脱光風霽月の風格を具へて居たのである。

## 四十七士の私淑

師範學校の校長が他に轉勤する由、新聞紙に報せられた際、訓導は密に同盟血判状を作り、文部省に其留任願を差出した、それは夜十時人々就寢の後、訓導が主となり、他の有志と共に行ひ此事は十年間必ず口外せぬと誓約してあつたのが、訓導殉難の後告白する人あり、始めて舎監の耳に入つた、然れども訓導は前校長去る後、新任校長に師事すること、前校長の時と毫も變りがなかつたので、舎監

も今となり驚歎して居る、胸宇の瀟洒活潑なる訓導は、運動が大好きで、水泳もテニスも、弓術も造詣が深く、或時友達が訓導の弓を挽きつゝあるを、傍らより戯に妨害を試みたるに、訓導の姿勢は、少しも撓まず、例の通りの中を誤まらぬのであつた、常に正直と本氣を信条とする訓導は、何事に就けても能率が人一倍増加し、裁縫は特に老巧で迅速、丹野榮之丞の妻や娘の、今現に着用しつゝある衣裳も、訓導の手に成れるので、舎監のは未だ、仕立おろし仕付けの儘のが、鄭寧に重襲されてある、病に伏せる友達の、衣服の裁縫洗濯は言ふも更なり、其の口に適せる食物などを擇びて、看護に手を盡くすことは、大抵な親でも及ばぬのであつた、修學旅行等の際は、職員の襦袢や足袋など何時も人の氣付かぬ隙に、洗濯されてあつた、級長として全生徒より金錢を集める時、その容器を目八分に捧げ、變な腰付きをしながら、御上使の御入來と言ひつゝ、部屋に入り來られた時は、噴き出さぬ人はなかつた、今もそれが一ツ話しになつて居る、會て生徒の用品を他の室から運ぶ時、訓導は他の人々の分をまとめて、大風呂敷に包み、脊負ふて來られたので、一同が氣の毒がると、訓導は内のカ、アでさへ運ぶのに、オヤヂが運ぶのは當り前だ、訓導はどんな寒い時でも炬燵に入ることのなきは勿論、火鉢にかちりつくこともない、寄宿舎の含嗽場の掃除を數人とする筈の處、凍り着て流れぬ故後に延ばしたのを、訓導は人の知らぬ隙に、獨で仕遂げ知らぬ顔をして居た、四十七士の話しが大好

きで其話しの時に特に襟を正うし、謹嚴な態度になられ、さながら訓導自身が四十七士の内の一人でもあつたかの如くに、聞く人の實感を深うせしめられるのであつた。

### 無限の追懷

炊事場の働き便所の掃除、風呂焚き下足の世話など、一番困難の處で、人々の憚る所は、何時でも訓導が人知れず、自ら進でこれに當る、卒業後寄宿舎退散の際も、一番仕舞まで居残つて、各部屋及び便所の隅から隅まで、鄭寧に掃除を反覆せられたので、校長始め職員が寄宿舎始まつて以來、前例がないと云て感歎した、服装でも手道具でも極めて飾りのない質素であるが、物事に骨身を惜まぬと同じく、人のため金品を費やすことは、毫も吝しまぬのであつた、卒業就職後、六月同窓會で母校に來る時、初めての月給で買ひましたからと云て、ビスケットの大きな罐を舎監室に持參されたのが、今も尙残つて居るとて、舎監は聲をくもらせながら、種々の感想を語るものであつた、佐藤武氏の集められた同窓生の感想文中に、柴崎せい氏の訓導に對する追懷の文に、大正十年十二月二十二日として、左の記事がある、歸省の用意に忙はしい際、小野さんと宗教談より死の問題に入つた、小野さんは死は藝術的とは思ひません、死そのものは人の思ふ程文學的なものでも藝術的なものでもないやうな氣

がします、死にまつはる所の壯烈な哀話があつて、始て死を美にし又藝術化するのです、誰でも容易に味へないために、神秘的に考へられるが、死は決して美くしいものではないのです、無限のタイムに瞬間の存在を許された、哀れな人間のいつかは、行かなくてはならぬ死の旅に、希望も歡喜も恐怖も不安も何も蚊も捨て、自ら上らうとするには、深い事情がなければ出来ないことです、罪を犯しせばつまつて自殺した時、誰がこれを美くしいと言へましよう、壯烈な哀話がひそむ時こそ、或意味に於て、死は讚美されるのですと、小野さんは滔々辯せられたとある、果して訓導はかゝる幽玄な問題にまで、研究を進めた、然して死を美にするは、壯烈な哀話が伴ふからであるとは、何たる豫言であらう、訓導が着の身着の儘で、漲る碧流に飛び入り、二人を救ひ、又も深淵に向て邁進し、其職に殉せしは、其言ふ所を實踐したのである、壯烈な哀話を以て死を呈露したのである、其常に私淑する四十七士と、肩を並べたのである、訓導自身はこれを以て瞑すべしと雖も、一朝の悲風に未開の花を散らし、國家に取りては終天の恨事である、吾輩は筆を執て此に至り、敬慕哀痛の情切なるに堪へず、白石川より拾ひ來れる一小石と母君より賜ひし遺愛の櫛と、校長の贈られし筆蹟とに、限りなき感懐を寄せ後髪を曳かるゝ思ひに沈むのである。

### 兒童の哀慕

訓導殉職十三日の後、宮小學校でこれを追慕するの餘、其受持たりし尋常四年生に、嗚呼小野訓導と云ふ題を興へて、思ふ所を綴らしめた、其宮地善助の文中に、小野先生は算術の時に、同じ人で同じ頭を持つて居るから、眞面目に行れば、誰でもできると云はれ、寫生の時には、思切て書けば、誰でも立派にできると云はれたとある、嗚呼此眞面目と思切り、洵に訓導の人となるが躍如として、今も生きて居る、虎は兎を撲つに、全力を用ゆ、舜も人なり吾も人なり、斷々乎として、眞面目に心血を傾注したらんには、天下何事か成らざらんやと、其至大至剛の意氣は、人の肺腑を衝き、惰眠を警しめ甚大の刺戟である、森きよの文に、小野先生が今は何處に居られるかと思ふと、悲しくてなりませんお葬式の時、御位牌を持ってお供をしました、悲しくして歩けません、毎日學校に來て庭に並んだ時、外の組では先生がちやんとついて居りますのに、私の組には、小野先生がいらしやらないのです、私は毎日お墓に参り、お花をあげ、線香をあげて、いくら小野先生を呼んでも返事がありませんとある、其いぢらしい哀慕の切なる、一讀斷腸の思に堪へぬのである、刈田郡教育會で集めた逸話中に、友に與ふる書狀に人生は愚圖々々しては追付かない沙汰である眞面目生一本で旅行する心の緊

張味を忘れてはならぬ、若し自分の姿の餘り貧弱なのに氣付いた時、そこに一體何を見出すであらう、唯自己の努力の足らぬのを歎くばかりであるところある、宮城師範の林舎監の話に、小野さんとして、今度の殉難は、一向不思議がないのです、在學中友達の苦痛困難は必ず自ら引受ける義侠性に富み、氣分が快活で、あかるく多くの女にある、表裏性や虚榮心は、何處を探してもなく、萬事につけ幸福を獨占する觀念が少しも見へません、質素な生活で成績優秀、常に級長を勤め、一般からは、信頼と尊敬の標的となつて居りましたとある、然り訓導は徹頭徹尾表裏性がなく、何人に對しても、何事に處するにも、蔭もなく日向もない、胸に城郭を設けないから、至誠が溢れて居る、若し生徒が訓導の教に違ふことがあると、訓導は泣いて其生徒に諭すと、生徒も打て變はるのであつた、禹王は途中罪人に逢ふと車より下り泣いて、堯舜の民は堯舜の心を以て心となし、寡人の世となつて、民各其心に従ふかと云ひし、昔も偲ばれてゆかしい、村人は今度の先生が來られてから、内の腕白も親の言ふ事を聞き折々は復習もするやうになつたと、寄ると觸ると評判が高かつた、或時頭痛のする生徒を背負て其家に送り、翌朝も其家を訪ふて、模様を尋ね手を曳て、學校に連れて行つたのである。

### 國家永遠の礎

七月七日殉難の地に駆け着けた醫者の話に、其時一人の老婆が蒼ざめて冷へ切た訓導の顔を覗き込むやうにして、「ドウか生き返つて下さい小野先生」と云ひつゝ、更に心の底から、湧き出る様な聲で、「天道様小野先生を助けて下さい」と、手を合せて居た、大の男がオイ／＼と聲を揚げて泣くのもあり、氣が遠くなつたやうに、ポーツとした者もあり、私の手にしがみ着いて、「一寸でもいゝから小野先生を活かして下さい」と、泣き入るもあつて、村の者は全く親か妻に死別れるやうに、哀痛を極めたこと其光景があり／＼と目に見えて、側々人を動かすも、訓導が至誠感激に活ける人格の象徴たるに、外ならぬのである、宮小學校の訓導佐藤保次氏の筆に成れる追想録に、同校の職員が追懐の切なる情況を叙せる中に、此校に教鞭を執ること三月半、芳紀僅に二十二の娘盛り、未だ晴れの衣裳も着けず、嫁にもならず、斯る女史が、冥世に旅立たんとは、夢か夢にあらず、何たる悲惨の極みであらう、嗚呼女史よ女史は、何の爲に此の世に生れ給ひしか、何の爲めに六年も中等教育を受けられたのか、何の爲めに學校の先生になられたのか、あまりに壽命が短かつた、修業も志望もタツタ七十一日の御奉公を、なさんがためであつたのか、七十一日は短いが、其殉職は尊いものであつた、女史の行動は誠を以て一貫されて居る、女史は神の使であつたか、何しても人とは思はれない、女史が初任で而も終りなる思出多き、宮の學校に居る吾等は、偉大なる女史と同僚となり、日夕談笑した時の事を思へば、言ひ知

れぬ光榮のまごひであつた、教室の柱には、今も尙掛けられてある、花挿がある是は六月二十六日母校宮城師範に女子研究會があつた時、兒童への土産として買ひ求めて來たので、時の花を活けて清新の氣を漂はさんとて、七月七日には、紫陽花が二本活けられてあつた、壘糸二本で繕ひ絡らんだラケット、使ひ残りのアテナインキ、是ぞ永遠の形見である、吾輩は現に其校長我妻氏にも、死屍を抱き上げた日下、佐藤、堤の三訓導にも、實話を聴き、其教室で花挿も見た、ラケットも見た、而して今此血を以て書かれた文を読むと、新感更に胸を衝て、張り裂く思ひに堪へぬのである、元和假武の後歳を閲する八十餘年、世は泰平に馴れ人心惰弱風俗淫靡、此時に際し霹靂一聲赤穂義士の快擧は、其世道人心を刺戟して頽瀾を既倒に挽回し、幕府遂に三百年の昇平を得た、現代の風氣を元祿の昔に比するは、殘念と思へど、或はそれに過ぎて居りはせぬか、小野訓導は四十七士の崇拜者であつた、其操持と其壯烈な殉難とは、四十七士のその如く現代を警醒し、併て永遠に國家の礎となるのである。

道のためののち捧げし手弱女の仕業見ならへ眞須良男の子よ

捨てし身の光は世々を照らすらん教の道の鏡とはして

### 卷末小言

労働問題、小作問題、住宅問題、救貧問題、育兒問題、物價問題と現代の社會は次から次へ問題の續出して底止する所なき狀況なるも要するに各人の操持が正直と本氣を恒心として世に處するならば紛争を絶ち能率を増し總ての問題は自ら解決せらるべし吾輩が烈婦小野訓導を尊信するは徒らに沈痛と感傷を以て人を激動せんとするに非ず現代の學問は深遠なり事業は隆盛なり技巧は周密なり制度は完備せり然して其所講る文化生活なるものが果して正直と本氣を以て終始せられつ、あるや否形式と輪廓の偉觀に伴ふ精神の活躍が存在するや否是吾輩が小野訓導の常に唱導する正直と本氣を江湖に呼號し時弊矯正の一端に資せんとする所以である今の世情は事あらば忽ち喧傳し事去れば忽ち遺忘し玉石共に過去に葬るを常とするも挺然として時流を抜ける訓導の偉蹟は他の發否若くは時の経過に因り消長するものと頗る異にし百世の下聞く人をして感奮昂起せしむるものあるを念ひ吾輩の豈かならざる朝夕衣食の資を割きこれを刊行し賤陋を顧みず全國の主要なる教育機關及諸團體に贈り志を同くする憂國の士に懇へ其參考に供せんとするのである讀者諸彦幸にこれを諒せよ

### 換 舌

貧弱な私の冷囊で刊行した烈婦小野訓導は無償にて全國の重なる  
教育機關及特志家に拜呈して御同感を得んとするですが

御多忙にて御一讀の暇なしとせらるゝ向竝に御一讀後御不用  
となりし向

右の場合は何卒私の微志を諒とせられ御手数ながら郵税先拂にて  
岐阜市八ツ寺町中田武雄宛御返戻相願度

學校の賞品其他にて御入用の向は岐阜市七軒町西濃印刷株式會社  
に御申越相成候得へば五部以上實費にて御求めに應すべく候

大正十一年十月三十日印刷  
大正十一年十一月三日發行

編輯兼發行者

中 田 武 雄

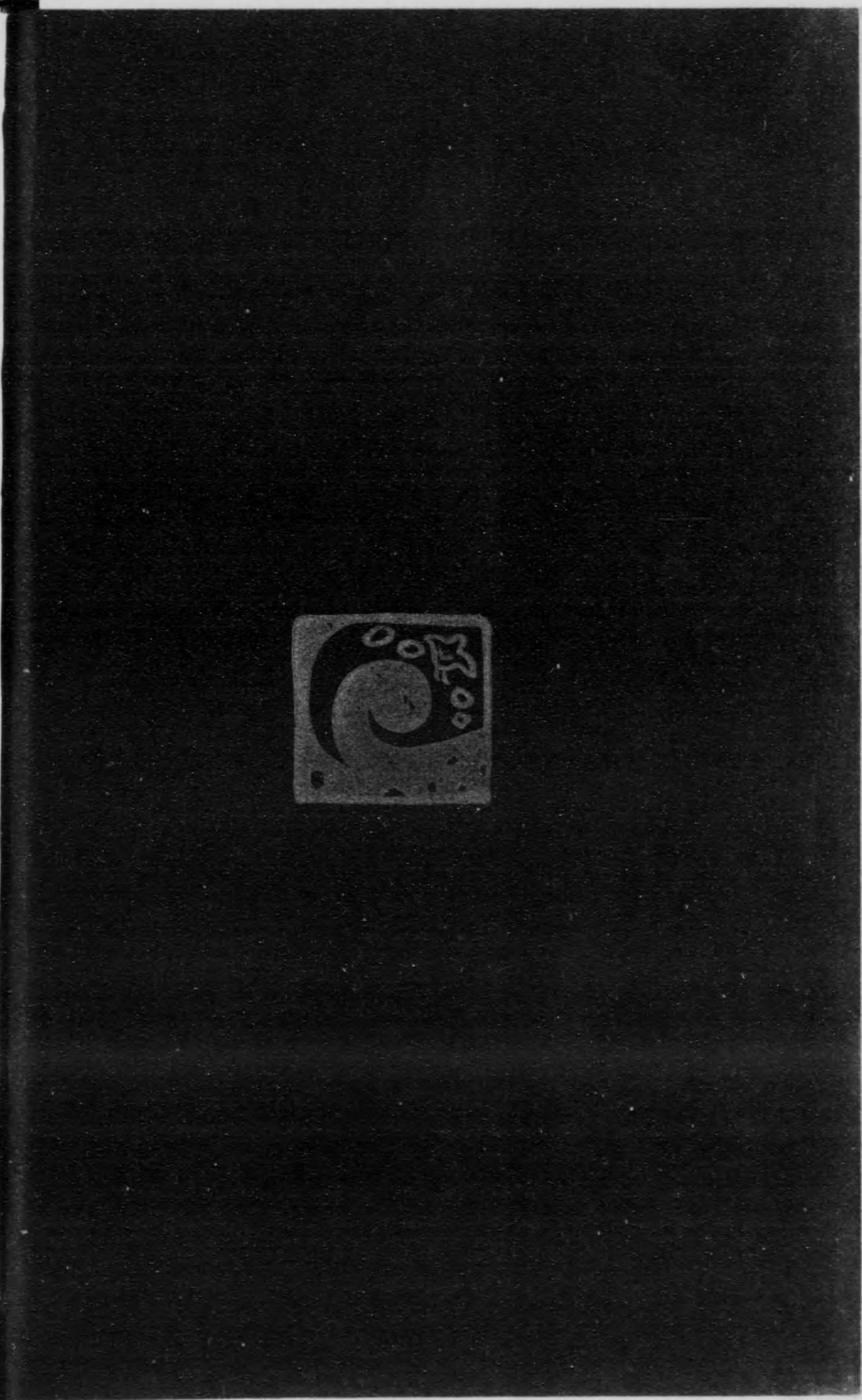
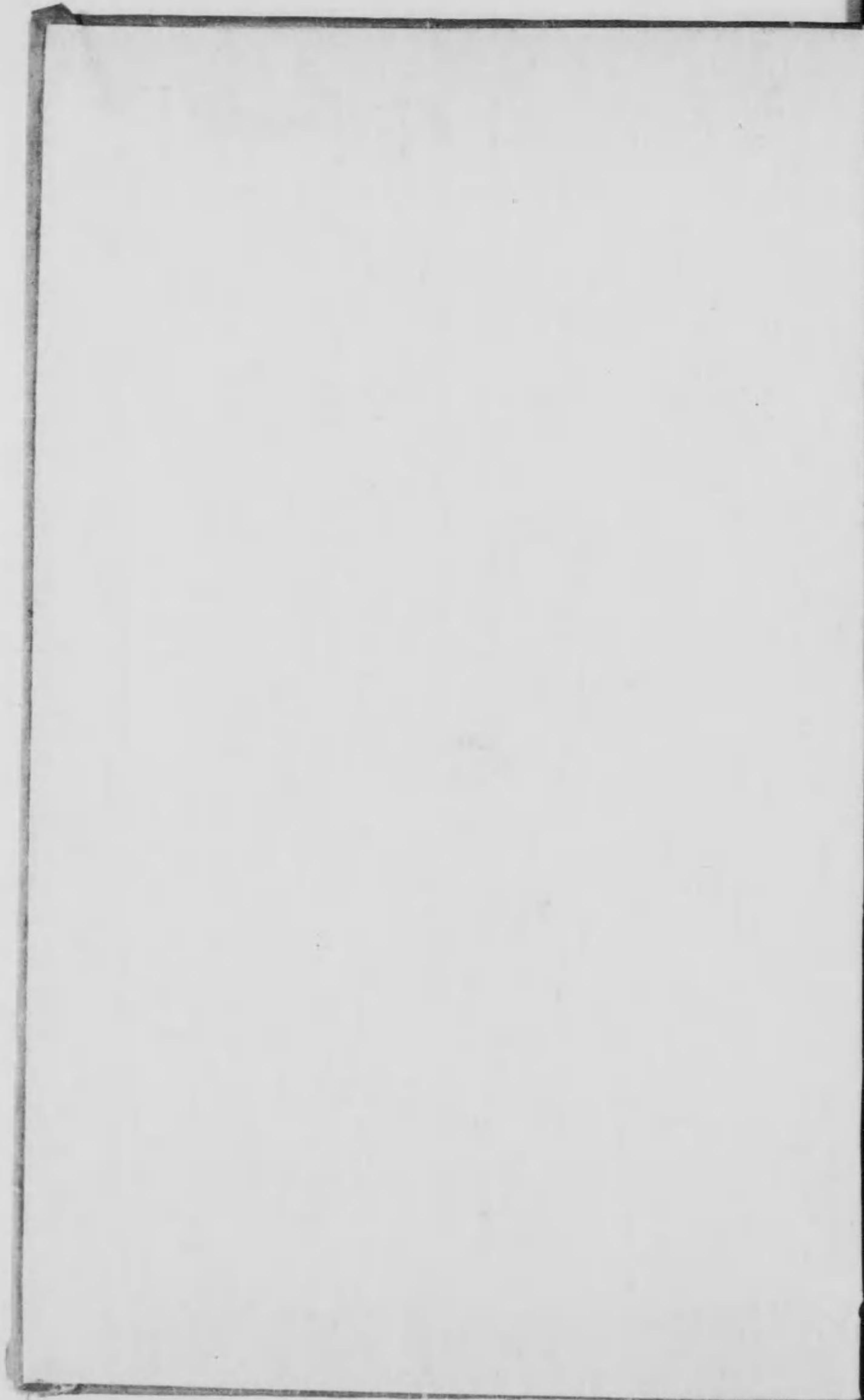
岐阜縣岐阜市八ツ寺町十七番地

印刷者 河 田 貞 次 郎

岐阜縣大垣市郭町百五十三番戶  
西濃印刷株式會社代表者

印刷所 西濃印刷株式會社  
岐阜支店

岐阜縣岐阜市七軒町十一番地





終

